

# ハルトマン・フォン・アウエの騎士道批判 — イーヴァインの罪をめぐって —

武 市 修

ドイツ文学の宝庫シュヴァーベンが生んだ最初の偉大な詩人、ハルトマン・フォン・アウエ (Hartmann von Aue) はドイツ中世の代表的詩人の1人である。彼が文学活動を開始した12世紀後半のドイツ騎士社会にとっては、フランスの宮廷文化に学びそれを消化、吸収することが最大の関心事であった。そこで先ず詩人たちに課せられたのは、先進文化の果実を紹介しドイツに根づかせることである。ハルトマンはクレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) の原作を翻案、改作した騎士叙事詩、『エーレク』と『イーヴァイン』で調和のとれた騎士道のあるべき姿を示し、いわゆる宗教叙事詩、『グレゴリウス』と『哀れなハインリヒ』では、正しい宗教的心構えを説いたというのが彼の定着した評価である。

彼の最初の叙事作品『エーレク』が原作を大きく改変し、新進気鋭の若き詩人の気負いが見られるのに対して、最後の作品とされる『イーヴァイン』はほぼ原作を忠実に再現しており、彼が「枯淡の境に入って」<sup>1</sup> いることを感じさせる。しかしそれが果たして、もはや文学が彼にとって自己自身との対決、存在の問題との対決ではなくなった<sup>2</sup> 結果で、この作品には一貫した根本問題を欠いて<sup>3</sup> おり、そもそも原作の根本理念を十分理解していなかった<sup>4</sup> とまで言えるのだろうか。そうではなく、彼が原作からわずかにそれているところにこそ、むしろハルトマンの独自性があり、彼がその枯れた筆で当時の騎士社会の問題を巧みに示して見せたのではないだろうか。本稿では先ず、イーヴァインの罪の問題を検討し、次に騎士の冒険を求める武者修業の意味を問い、最後にアルトゥース王登場の場面を取り出して、原作<sup>5</sup> と比べながら、ハルトマンの独自性を探ってみたい。

泉の冒険を克服し、美しい未亡人ラウディーネの愛を得たイーヴァインは幸福の絶頂にあり、冒険物語としてはここで終っても不思議ではないのであるが、実は物

語の本题はここから始まる。親友ガーヴァインから、妻への愛に溺れて騎士の務めをないがしろにしないよう、今までどおり武芸を磨き、一層名声を高めるべきだと強く説得され、奥方の許可を得て泉の国を去った主人公は、比武に熱中する余り1年の期限の過ぎるのも忘れる。妻の使者ルーネテにアルトゥース王の面前で、言葉と行動の一致しない不実な男と面罵され、余りのショックで彼は正気を失って森に迷い込み、狂人の生活を送る。ナーリゾンの夫人が持っている秘薬に救われた彼は、アーリエルス伯爵の暴力に苦しむ彼女を解放したあと、助けたライオンを伴って、何の希望もないままに思いがけずあの泉に行き当たり、身の不幸を嘆いて言う。「誰に強制された訳でもなく、私は自分の過ちのために愛しい人の愛を失ってしまった。それは決して彼女のせいではない。」(Iw. 4006-9) また、そこで自分のために裏切り者としてお堂に閉じ込められ、翌日の処刑を待つ身のルーネテに会って、「私は何ということをしてあの方の愛を失ったのか。この罪は私以外の誰のものでもないのだから、その罰もまた私ひとりが受けるべきなのです。私はそれを誰のせいにもできません」(Iw. 4216-21) と言う時、イーヴァインは愛する人の信頼を裏切り愛を失った自分の罪をはっきりと自覚している。

主人公の罪が妻との約束を反古にし、不幸に突き落とした点にあることは、原作においてもはっきりと示されている。ラウディーネは夫を殺した男との結婚を勧められ、激怒して侍女を追い払ってみたものの、それまでの彼女の忠誠を思い起こし、また泉の守りを非常に心配して一晩中悩んだ末に、その男は自分に害を加えるために夫を殺したのではないから、自分に対しては罪がないと判定し、その男に頼るほかないと思ひ定める。ルーネテの進言どおり、予め家臣たちの賛成も取りつけておいた彼女は、初めてイーヴァインに会った時、泉の防衛の意志を確認し、彼から、全世界を相手にしても守るつもりだと誓わせる。彼女はそれが国家的理由からの止むを得ない決断であり、泉の防衛がこの道徳的に許しがたい結婚の唯一の正当な理由であることを強調する。従って、イーヴァインが与えられた期限を破って、誓った義務をないがしろにしたのは許されざる違約であり、ラウディーネの社会的名誉を傷つけ、命の恩人であるルーネテの、主人に対する忠誠をも無効にし、それどころか彼女を裏切り者にしてしまった大きな罪である。

狂気から癒されたあともずっと、イーヴァインは罪の重大さを認識している。「喜びと慰めを自分の罪と不正のために失う者は自分自身を死ぬほど憎まねばならず」(Yv. 188)、彼は「返すことができないほどの借りをつくっており、[…]愛する人が怒りを捨てて許してくれるまでは苦しみが終わらない。」(Yv. 231) クレティアンにあっては、ルーネテを救ったライオンの騎士のことをラウディーネが聞

いたことも会ったこともないのは、彼が「ほとんど世間に知られていない」(Yv. 231) からである。贖いの旅で暴力に苦しめられ苦難にあえぐ人々を救うことによって、黒いばら伯爵の妹娘の代りにライオンを連れた騎士を捜す乙女に、「あなたの名声の大きさが、つらい旅を引き受けて諸国を回らせた」(Yv. 251) と言われるまでに彼の名は高まる。最後の最も困難な試練、正体を隠したガーヴァインとの一騎打ちで、アルトゥース宮廷一番の騎士に優るとも劣らないことを実証した彼は、十分に罪の贖いを果たしたのであり、遂に、再びルーネテの取りなしによってラウディーネに許され和解する。

愛を捧げるべき貴婦人への奉仕と、比武に励み武名を高める務めの両方が相俟って、理想的な宮廷人であるということのを忘れ、愛する人への奉仕をないがしろにしたため追放され、長い誠の証しののちにやっと罪が許されるという原作のテーマ<sup>6</sup>を、ハルトマンも勿論、受け継いでいる。しかしここでは、イーヴァインが心変わりしたことがなく、強い忠誠心を持っていたことが語り手の口から特に述べられ(Iw. 3210-11)、また、ルーネテ救出の戦いで重傷を負った名も無き騎士とライオンに、留まって傷の手当をするように申し出るラウディーネに向って、「私は愛する方の好意を取り戻すその日まで、決して安らぎを得ることも喜びを味わうこともありません。その方の愛を私は罪もなしに (âne schulde) 拒まれているのです」(Iw. 5466-70) と言う時、イーヴァインには彼女への誠を変わらず持ち続けているのに、なぜこれほどの苦しみを受けなければならないのか分からないのである。つまり彼の罪は彼の意識の外に存在するようである。そこで我々は彼の泉の冒険の場面を振り返ってみよう。

イーヴァインは聖霊降臨祭の祝宴の場で、カーログレナントの失敗に終わった不思議な冒険談を聞いて、従兄弟の復讐を誓い、カイイにあざ笑われる。昼寝から起きてきたアルトゥース王がこの話を聞くと、王は2週間後にみずからの目で確かめに行くことを父王の魂にかけて誓う。そうなればまず、ガーヴァインに泉の騎士との決闘が許されるだろうから、復讐を誓った自分の面目が立たないと思った彼は、先手を打って秘かに出かけ、この不思議の国の領主と一騎打ちに及ぶ。兜を打ち割られ瀕死の重傷を負った相手が死の恐怖に捉えられて逃げ出すと、イーヴァインはもしこの男を殺すか捕虜にするかしなければ、誰も証人がいないので、それまでの苦労も水の泡になり、またあのカイイの侮辱を受けるはめになると考え追跡する。かろうじて城まで逃げのびた敵は、城門に駆け込み、落とし門を落とすが、その時、イーヴァインはうしろから切りつけるために、体を前方にぐっと伸ばしたので、九死に一生を得る。原作では、主人公は逃げる相手をつかまえようとして体を伸ばし

たのであり、この時、彼には城主殺害の意志はなかった。従って、のちにルーネテの取りなしで美しい奥方に初めて会い、奥方の夫アスカロンを打ち殺したことを許してもらおうと一緒に頼もうと言われた時、彼は「まことに恋をする男らしく」(Yv. 109) どんな仕打を受けてもありがたいことだと思いが、許しを乞うことなどはしないと言う。そして、相手が攻撃してきたから防戦して倒すのが罪だといえるのかと問いかけ、彼女の口から無実だと言わせる。ここでは、アスカロン殺害については騎士どうしの一騎打ちとして、始めから罪は問われていない。

これに対しハルトマンでは、亡き夫を悼み髪ひきむしり、衣服を引き裂いて悲しむ美しい奥方を見て恋のとりことなった主人公が、絶望的な恋を嘆いて言う。「ああ、神様。誰が私に私を死ぬほど憎んでいる女性をこんなにも強く愛する気持ちにさせるのでしょうか。それとも、つい今しがた犯したばかりの罪のこんなにも重い重荷を背負った私に、あの方が好意を寄せてくれるようなことが果たして起こり得るのでしょうか。」(Iw. 1610-20)<sup>7</sup> 彼はまた、ラウディーネを前にして、ルーネテから「大きな罪を犯した」(Iw. 2277) のだから許しを乞うように促され、罪を犯した人らしく (als ein schuldiger man, Iw. 2285) 彼女に罪の許しを願う。ここではルーネテもイーヴァインも、アスカロン殺害をはっきり罪だと認識している。勿論、彼らが罪と言うのは、奥方から最愛の人を奪い、彼女を悲嘆のどん底に突き落したことを指しているのであろうが、しかし語り手が、傷ついて逃げる相手を騎士のたしなみもなく (âne zuht, Iw. 1055) 追いかけて、うしろから切りつけて致命傷を負わせたと言う時、ここにもイーヴァインの罪の認識と作者のそれとの間にはずれがあり、作者はそこにもっと深い意味を込めているのではないだろうか。このような視点のもとで、我々は更に、イーヴァインが幸福の絶頂から不幸のどん底に落ち込むことになったそもその発端にまで溯ってみよう。

## 2

カーログレナントの冒険行は、不幸に終わった結末を別にすると、のちにイーヴァインが行なうのと全く同じ道で、これ自身が一つの完結したアルトゥース騎士物語である。

プレツィリヤーンの森に馬を乗り入れ、冒険を求めて道なき道を苦労して進んで行ったカーログレナントは、一つの城に行き着き、すばらしい歓待を受け、美しくやさしい城主の娘との楽しい語らいのひとときを持つ。これはまさに当時の遍歴の

騎士の大きな喜びのひとつであったであろう。食後の語らいで、彼は城主に冒険を求めて旅をしていると言うと、原作では、城主はそういう遍歴の騎士にすでに何度も宿を提供してきたので、帰りに是非また立ち寄るように勧める。その後、泉の冒険に失敗してみじめな姿で帰ってきたカーログレナントに城主は、今まで見たり聞いたりして知っている限り、泉から無事に戻った者はなく、皆、殺されたか捕虜になったのだと言って慰めて、行きに立ち寄った時にも劣らない心のこもったもてなしをしてくれる。ハルトマンでは、この城主は冒険を求めて来た客などひとりもなかったと言って驚く。また、城を出て途中で出会った、野獣を思いどおりに支配している恐ろしい形相の森の男とカーログレナントとのやりとりは、クレティアンでは次のようである。「さあ、言ってくれ、お前は善良なものか、そうではないのか」、「わしは人間だ」、「一体どんな人間なのだ」、「お前が見てのとおり人間で、他のものでは決してない」、[…], 「[…] 今度はお前の方も、お前がどんな人間で何を捜しているのか教えてくれ」、「お前が見てのとおり、私は騎士で、見つけれないものを捜しているのだ。もう長い間捜してきたが、何も見つからない」、「一体何を見つけたいのだ」、「冒険というものだ、私の騎士としての徳操と私の勇気を試すために。」(Yv. 31-33)

これに対して、ハルトマンはこの場面で、カーログレナントの口から冒険について詳しく語らせる。「私のこの武装を見たまえ。私は騎士であって、私と同じように武装した者で、私と戦う相手を捜して旅をしている。相手が私を倒せば、その男の誉れになるが、私が勝てば、一廉の者とみなされて値打ちが上がるのだ。[…]」(Iw. 529-537) 森の男が答えるには、「お前は危険を求めて、平穩な暮らしをしたくないと言うのだな。わしはこれまで、冒険というものがどんなものか、聞いたこともない。[…]」(Iw. 544-546) 野牛よりも大きな頭、牛のような大きな鼻を持ち、猪の牙のような鋭い歯が両頬まで裂けた口から突き出た男、獣から剥ぎ取ったばかりの毛皮を身につけた、見るも恐ろしい森の野人の口からこんな言葉が出るとは、何という皮肉だろう。何とも巧みなハルトマンのイロニーではないか。

こうして森の男に教えられたとおりの道を進み、泉の石に水を注ぎかけると、大嵐が起り、命運も尽きたかと思われた。やっと嵐が収まると、今度はまるで一隊の軍勢のような勢いで泉の守護者が駆けつける。彼は森の闖入者、平和の攪乱者を認めた時、次のように言う。

騎士よ、そなたは不実な男だ。

私はそなたから挑戦を受けた覚えもないのに、

そなたの思い上がりから  
 ひどい苦しみを与えられたのだ。  
 私の森の様子はどうか。  
 そなたは私の森を台無しにし、  
 野獣を殺してしまったのだぞ。(Iw. 712-719)

思い上がった心から (in iuwer hōchvart) 無分別に泉の水をかけ、罪もない (âne schulde, Iw. 728) 者に大きな損害を与える。これは不実な (triuwelōs) 男のすることである。しかも、カーログレナントは相手の方が強そうなのを見て恐れをなし、知らずにしたことだから無実であると申し立てて許しを乞う。彼は騎士としての勇気をも欠いており、これは彼自身が口にした騎士道にももとの態度である。武者修業に出て武芸を磨き、武名を高めるのは、騎士叙事詩では騎士の当然の義務であるが、ハルトマンはカーログレナントの冒険を、上で見たように描写する時、彼は単純な冒険に対して批判的な見方をしていたのではないだろうか。

傲慢、思い上がり (übermuot, hōchvart) は宮廷人が陥ってはならない、立派な騎士にあるまじき心持である。それは不遜な態度となって表われ、人を苦しめ、禍いをもたらす。ハルトマンはこの叙事詩で übermuot を2度、hōchvart を上の個所の他に4度使っているが、この言葉で規定される人物はいずれも不幸をもたらす元凶であり、狂気から回復したあとのイーヴァインの姿と好対照をなし、彼の騎士らしい心映えを際立たせている。ラウディーネはイーヴァインとの結婚を求める時、「あなたは私の主人を倒したのですから、きっととても武勇に勝れたお方でしょう。神様が私にあなたをお与え下されば、私はあなたのお力でどんな外敵の思い上がった暴力からも (vor aller vremder hōchvart) しっかり守って頂けるでしょう」(Iw. 2322-2326) と言うが、イーヴァインのような傲慢な外敵が侵入してくることさえなければ、彼女は夫を殺されて悲痛な思いをすることはなかったはずである。イーヴァインはもともとこのような外敵として、彼女に苦痛を与えたのであった。狂人となったイーヴァインが森で眠っているのを見つけ、それがイーヴァインだと分かった侍女が女主人に向かって、「御主人様、もしこの方が私たちの手で癒されましたなら、あのアーリエルス伯爵が思い上がった心から (durch sinen übermuot) 長い間あなたを苦しめ、またこれからも与えるつもりでいる苦難は、すべてあなたから取り除かれることでしょう」(Iw. 3408-13) と言う期待に応え、彼は騎士としての命を救ってくれた恩人、ナーリゾンの夫人を傲慢な伯爵の迫害から救う。その時彼は、逃げ出した伯爵を城まで追って行き、捕えて捕虜にする。それ

はもはや、同じような状況でかつてアスカローンにうしろから止めの一撃を浴びせたイーヴァインではない。

何の希望もないままに旅に出た主人公は、やがて巨人ハルピーンの暴力に苦しめられる。ガーヴァインの義兄弟の城にはからずも行き当たり、彼は「まことに、城主殿、もし私にできますなら、私は私たちの友をお救い致しましょう。神様がその男を倒して下さるでしょう。あれは非道な男です。この戦いで私を大いに力づけてくれるのは、あなたの正しさとあんなにもひどいあの男の思い上がりです」(Iw. 4958-64)と言って救助を約束する。すでに息子2人を殺され、残りの4人も殺されるのを救われた城主にとっては、「神様が私を助けるためにあの方をお遣わしになった」(Iw. 5836)のである。イーヴァインは今や、ライオンを連れた名もなき騎士であり、神に遣わされた戦士である。

黒いばら伯爵が残した財産をひとり占めする姉に向かって妹は、「アルトゥース王を訪ね、その宮廷で私の方も戦士を見つけます。その方は私を高慢なあなたから(von dīner hōchvart)騎士の徳操にかけて守って下さるでしょう」(Iw. 5659-62)と言うが、父の遺産を妹にも相応に分けてやれば、争いも起こらず、アルトゥースの最も勝れた2人の騎士に命をかけて戦わせずとも済んだのに、驕慢でかたくなな姉は、あくまでも遺産をひとり占めにしようとする。アルトゥース王の「ひとえにその思い上がった心のために(durch ir übermuot), 2人に父が残した遺産と財産を、姉妹に与えるのを拒否する娘はどこにいるのか」(Iw. 7655-59)という言葉に、ついうっかりと口をすべらせて返事し、自分の非を公衆の前で認めさせられて一件落着となったが、もしそれがなければ、すんでのことに取り返しつかない結果を招くところであった。

世間知らずの妹は自分の決意をうっかり漏らしたため、狡猾な姉に先を越され、頼みにしていたアルトゥース宮廷で代理の戦士を得られず、噂に聞くライオンの騎士を捜しに出て病気になり、親戚の城主の娘に代理を務めてもらうが、それが高慢のため(durch hōchvart, Iw. 6039)でもなく、怠慢のためでもなかったのに、義のあるところから、「良き使者を立てる人はその目的を達する」(Iw. 6065-66)ことができた。その娘がやっと出会った騎士に援助を申し込んで断わられたらどうしようと心配しながら、神に祈り、思い切って彼に、「慈悲を求めて」(ûf gnāde, Iw. 5999)遠くまで捜しに来たと告げると、彼は「慈悲などとはおこがましいことです。私の奉仕を必要とし、それを求める善良な人には、私の奉仕は決して拒まれることはありません」(Iw. 6001-4)と答える。善良な人で困っている人のために奉仕しようということを心がけるイーヴァインは、自分の面目がつ

ふれるのを恐れて、傷ついて逃げる敵を「騎士のたしなみもなく」うしろから切りつけた時の姿とは全く異なり、今や名もなきライオンの騎士として名声も求めず、神の導くままに苦しみにあえぐ弱者や女性を救う、宮廷人の模範である。

イーヴァインの真実の冒険の旅の最後は、名を伏せたガーヴァインとの壮絶な一騎打ちである。当代随一の非の打ちどころのないアルトゥース騎士と、身命を賭して正義のために戦う神の戦士は、もう神が遣わされた助っ人のライオンを必要としない。丸一日に及ぶ激しい突き合い、打ち合い、切り合いの末勝負がつかず、互いに相手の勝れた戦い振りに感動した両者のうち、ガーヴァインが甘んじて敗者の立場をとり名をなめることによって、激しい敵意は曇らない友情にとって代られる。今やイーヴァインは、心持ばかりでなく、実績においても完成された騎士ガーヴァインに優るとも劣らないことが実証された。彼は内面と外面が一致した、中世の完全な騎士であり、プロロークで称揚されるアルトゥース王にも匹敵する。

## 3

ハルトマンはプロロークで、「およそまことの善を心がける人には誰にでも、幸福と名誉が与えられるものである」(Iw. 1-3)として、それを実証するのが勝れた王アルトゥースであり、榮譽の冠を戴いていた彼は、肉体は死んでもその名は今でも生きていけると言う。ところが、そのように非の打ちどころのない理想的な王として賞賛された姿と、物語中に登場する王の実像とはどうも一致しない。王は祝宴の途中で王妃を連れて寝室へ行ったり、カーログレナントの失敗に終わった冒険談を聞いて、好奇心からそれを確かめに行こうとしたり、或はまた、裏切り者の汚名を着せられ処刑される危機に瀕したルーネテも、ハルピーンに苦しめられる城主も、彼の宮廷で救助の戦士を見つけられない。最も甚しいのは、メリヤガンツの不当な要求を認めて王妃を連れ去られるという、王にとってこの上もない恥辱も、ガーヴァイン不在のため防ぎようがなく、居合わせた騎士たちが奪い返しに行っても悉く打ち負かされる。更に、黒いばら伯爵の2人の娘の遺産争いでは、一見して非は姉の方にあるのに、妹を助けてやるができない。このようなアルトゥース王の姿、アルトゥース宮廷のあり方は、当然批判の対象となり、ここにハルトマンのアルトゥース批判を見ることができのかもしれない。<sup>8</sup> 我々は、聖霊降臨祭の場面、王妃誘拐の場面、遺産争いの裁きの場面を検討し、クレティアンとハルトマンの比較から、ハルトマンにおいてアルトゥース王はどんな意味を持っているのかを探ってみよう。



物語はカリドールの宮廷での、あとにも先にも見たことがないほど素晴らしい聖霊降臨祭における宮廷騎士たちの様々な楽しみの描写から始まる。ところがその宴の最中に、王は客や騎士たちを放っておいて、王妃と共に寝室に引きとってしまう。原作では、この王の振舞を非難の目で見守る者がいることを伝えている。「しかしその日は、彼らは王が彼らの間から立ち上がって〔眠りに行ったのを〕非常に驚いた。それを大変不快に思い、色々取り沙汰する者もいた。なぜなら、そんな盛大な祝日に、王が眠り休息するために部屋に引きとることなど、一度も見たことがなかったからである。ところがこの日は、王妃が王を引き留めたため、王は彼女の許に長居し、時の経つのも忘れて眠り込んでしまった。」(Yv. 17) 王のこの振舞を同じ場面ですらなく寝そべっているカイイの姿と重ね合わせて、アルトゥース批判を見る論者<sup>9</sup> もいるが、ハルトマンはここでは簡単に、二人が疲れたからでなく、仲睦まじくするために (durch geselleschaft, Iw. 83) 客たちの許を離れ寝室に引きとって、やがて眠り込んだと述べるだけで、騎士たちの批判を省いている。この変更は、のちに見る場面からしても、ルー(Kurt Ruh)<sup>10</sup> の言うように、アルトゥースの名誉を救うためとるのが妥当であろう。

次に、この物語の中で最も奇妙な、内容的にそぐわないと批判される王妃誘拐の場面をみよう。この挿話はガーヴェイン不在の理由として話されるのであるが、クレティアンでは次のようにカイイの責任であるかのように描かれている。即ち、ルーネテの口から「ひとりの騎士が王妃様をさらって行ったのです。王様が彼のあとから王妃様を送り出されたのは、正気を失った人のなさりようでした。思いますに、カイイが、今、王妃様を連れてくる騎士のところまで王妃様のお伴をして行ったのです […]」(Yv. 189) またガーヴェインの義兄弟の言うには、「ひとりの見知らぬ騎士が王妃様を渡すように要求して連れ去りました。しかし王妃様を自分に任せ、その保護下に置くよう王様をそそのかしたカイイがいなかったら、その男は王妃様をさらって行くことはできなかったでしょう。」(Yv. 199) これに比べてハルトマンは城主にその顛末を詳しく説明させている。城主の話によれば、見知らぬ騎士が、

私はお情を期待して参りました。

王様、私はあなたが気前のよい立派な方

であると聞いております。

きっと私がお願いする贈り物を

あなたは拒んだりなさらないと存じます。

それを頂くために私はここへ参ったのです。(Iw. 4537-42)

と言うと、王は次のように答える。

そなたがこの宮廷で欲しいと願ひ出るものは何であれ、  
それが求めるのにふさわしいものであるならば、  
どんなことでも叶えられる。(Iw. 4544-46)

するとその男は、例外をもうけるなどとは王らしくない、何を願うかは自分に任せてほしいと言うので、王は拒否すると、男は、何を願っても叶えられると聞いていたのに、王について語られている立派な噂はうそで、世間の人も欺かれているなどと侮辱して立ち去る。そこで王の名声に傷がつくことを恐れた円卓の騎士たちの説得を容れ、その騎士を呼び戻して、願ひ事は何でも叶えてやろうと約束したところ、事もあろうに王妃を連れ去りたいと言う。しかも、王には沢山の選り抜きの騎士が付いているのだから、それらの騎士たちに王妃奪回の機会を与えるため、ゆくりと馬を進めるので、誰でも追いかけて来るがよいと自信満々に言い放つ。

これはアルトゥース宮廷全体に対する挑戦であり、たとえガーヴェインが居合わせても同じ要求をしていたことであろう。なぜなら、その男は円卓の騎士が居合わせる時をねらって来たのだから、この場面をハルトマンがわざわざ詳細に描いたのはなぜなのか。アルトゥース王の無力を示すためであろうか。もしそうなら、何のためにそんなことをしたのだろう。ただこの話が聴衆にとって面白いから<sup>11</sup> だけは考えられない。この場面が語られるのを聞いた当時の騎士たちは、果たしてどのように感じたであろう。勿論、アルトゥースのふがいなさに憤慨する者もいたかも知れない。しかしここで我々は当時の騎士たちにとって誓いというものの持つ重みを考えなければならない。「王が一旦口にした言葉、それは誓いと同じであった。」(Iw. 4583) そして「王は父の魂にかけて誓ったことは必ず実行することにしてきた」(Iw. 893-896) のであった。因みに物語最後の場面で、信頼と愛情を裏切られ、あれほど憎んでいたイーヴェインをラウディーネが許すのも、彼女が事情を知らないままにルーネテの言うとおりの誓いを立てていたからである。ルーネテも誓いの持つ意味をよく知っており、先のような結果にならないように、今度は慎重を期して巧みに奥方に誓わせただけであった。イーヴェインが誓いを破り、妻を悲しませる事態を招いたのも、そういう意味で騎士には許されざる罪であったのである。宮廷を立派に維持する前提は、宮廷社会の規範を守り、極端に走らず、騎士としてあるべき節度 (mâze) を守ることであり、その前提が崩れれば宮廷社会は混乱する。一部の者が一方的に騎士の規範を守るだけでは、騎士の理想社会は成り立

たない。互いに守るべき規範を守り、節度を保ち、義務を果たしてこそ、社会は平和に維持される。アルトゥース王がメリヤガンツに、betelich (Iw. 4546) に願うのであれば何でも願いを叶えると制限をつけたのは、このことを意味しており、メリヤガンツはそのような前提を無視する破戒僧的な典型を示している。騎士身分に属していることが道徳的価値の尊重を保証する、という信頼関係が有効であるのは、その階級の構成員が一定の規範を守る限りにおいてである。アルトゥースはこのことを十分認識しており、それ故にこそ、betelich に願うことという条件を出す。他の騎士たちにはそれが分からない。それで、王妃を誘拐しようという底意を持った男の非難を受けて、形式的な名声が損なわれるのを恐れ、王に誤った忠告をして取り返しのつかない事態を招く。王はしかし宮廷の「規範の代表者として、約束した言葉を破る訳にはいかず、むしろどんなことがあっても、約束したことを守らねばならないので、王妃を失うという危険さえも犯さざるを得ない。」<sup>12</sup> ガーヴェインがその援助を緊急に必要とされる時に、ちょうど宮廷に不在であることと共に、ここにアルトゥース宮廷全体の無能さの批判、その硬直した倫理性の批判を見る<sup>13</sup> のはいかなるものであろう。そのような単純なアルトゥース批判ではなくて、ハルトマンは、あくまでも規範を守ろうとするアルトゥースの姿を通して、当時の、現実には未熟で無教養な騎士たちに、宮廷人として守るべき礼節を、批判的に教示したのである。クーン (Hugo Kuhn) は、『エーレク』においてもうすでに、「宮廷的な徳の体系についての理想化する教化ではなく、その創造的な批判が問題とされる」<sup>14</sup> と述べているが、とりわけ、『イーヴェイン』の王妃誘拐の挿話にそれがはっきりと表われていると言ってよいだろう。

遺産争いの裁きに臨むアルトゥースの、裁き手としてのあり方も、この延長線上に見ることができる。妹が代理の戦士を捜しにアルトゥース王の宮廷へ行くことを聞いた姉は、先手を打って先に行き、秘かにガーヴェインの約束を取り付ける。最高の騎士を戦士にした姉は、この訴訟に勝ったも同然であるので、すぐにでも裁きの戦いを始めてほしいと主張するが、しかし王はきまりどおり40日の猶予を与えることにし、妹はライオンの騎士を捜しに旅に出ることになる。クレティアンでは語り手も、王も、またその他の廷臣たちも、始めから妹の味方である。語り手は、妹に対して余りにも不正が明々白白であるのに、姉がお追従を言ったり頼み込んだり、あらゆる方法を使ってガーヴェインを味方につけ、彼を義のない戦いの戦士としてひっぱり出したと述べ、王もまた、姉の不正、不実をよく知っているので妹の側につき、彼女が期限ぎりぎりに戦士を連れてきたのを見て喜ぶし、妹は一同の喜びに満ちた歓呼の声援に迎えらる。

これに対しハルトマンでは、語り手が時々姉の不当を示唆するが、登場人物はそれを知らない。彼らはどんな一騎打ちが行なわれるか見たいと思って裁きの場の席につく。ただ、現われた素晴らしい2人の騎士のどちらかが倒れることになるのを残念に思っ、姉に遺産を少しでも分けてやるよう説得してほしいと王に頼むだけである。しかしガーヴァインを後楯にする姉が応じないので、王は戦いを始めさせざるを得ない。互いに相譲らない壮絶な打ち合いに感動し、2人のどちらをも殺したくない気持ちをますます強くした一同は、せめて遺産の3分の1でも4分の1でもいいから譲ってやるように、再び王に姉の説得を懇願する。クレティアンでは王は、姉の陰険さをよく知っているの、和解の仲立ちをしないと声明する。ところがハルトマンでは、ふたりの戦い振りを見て、こんな立派な騎士が自分のために命を落とすことになるぐらいなら、自分の要求を取り下げて、姉に遺産を全部譲ると気立のよい妹が申し出るのを聞いて、皆が、3分の1までとはいわずともせめて少しでも妹に譲るよう姉に取りなししてほしいと懇願すると、もしそうしていたら姉も受け入れたであろうが、王は殊勝な妹の心がけをあわれに思い、妹から遺産を取り上げる気になれず、また彼女がこの件を王の裁きに委ねていたの、姉に取りなしをしない。この点、ハルトマンの方に、妹が当然受け取る権利のある遺産の取り分を減らすような裁定を下さず、法廷の裁きに従って、妹の権利を守ろうとする王の意志が見られる。

結局、戦いの決着がつかず、日没のために勝負は翌日に延期となり、ガーヴァインが名をなめることによって、ふたりの敵は、実は肉親にも優る友愛に結ばれた友であることが判明し、互いに相手の名誉を高めようと、勝利の譲り合いをする。一種の神明裁判による裁きが不可能となったこの時点で、アルトゥース王は初めて主体的に行動する。彼はふたりの卓越したアルトゥース騎士の友情を喜び、ふたりにとって最も名誉になり、世間も彼を賞賛するような裁きをするから、その争いの決着を彼に任せるように言い、誘導尋問のような形で姉に不正を認めさせる。ハルトマンで王が、「姫君、そなたは御自分で白状した。それがこんなに大勢の者の前でなされたのだから、そなたは発言を撤回することはできぬ。もしそなたが判決に従うつもりがあるなら、妹君から取り上げたものを彼女に返さねばならぬ」(Iw. 7665-70)と言う時、王にとっては、正義を正しいやり方で、つまり法に従って貫くことが最も大切である。もし力で事を決めてよいなら、それは簡単である。王が正しいと思うだけでよいなら、このような争いをせずとも、姉に不正を宣し、妹に有利な判定を行なえたはずであるが、社会を正しく導くためには、恣意的な決定を下すのではなく、あくまでも規範に則って行動しなければならない。その故にこそ、

王はこの事件で法と正義のジレンマに陥り苦しんだのである。本来は、正義と法は一致するはずのものであり、ドイツ語の *Recht* はどちらも意味する言葉である。両者が一致すれば争いも起こらず平和な社会が維持されるが、しかしそこにギャップができれば、社会は混乱する。

ハルトマンは上で見たように、この遺産争いでは原典にみられるアルトゥース王の明らかな妹への肩入れを和らげ、王にあくまでも規範の代表者としての行動をとらせている。ガーヴェインがよく確かめもせず不正な姉の代理の戦士となり、王も姉の不正に手をこまねいて何もできないという点に、ハルトマンのアルトゥース及びその宮廷に対する批判を見ることは、妥当ではない。姉は心情的には悪者の代表のように見えるが、しかし、クレティアンが次のような結末をつける時、法律的には姉は必ずしも不正を主張しているとは言い切れない。即ち、ガーヴェインと自分の意見が一致しているのだから、神の裁きの敗者としてすべてを失うことになるぞという王の威嚇の前に、姉も遂に我を折り、「私の相続財産のうち、妹の取り分を与えるのに、あなた御自身を証人と致します」（Yv. 315）と言うと、「それでは今すぐそれを妹君に授けるがよい。そして彼女はそなたの家臣となり、それをそなたから封土として受け取るがよい。これからはそなたは彼女を家臣として愛し、妹君はそなたを主君として、また血を分けた姉妹として愛するのじゃ」（Yv. 315-17）と答える。このような判定から見ると、封建社会の中で、姉にはやはり長子相続権があり、妹の要求は、恐らく父の遺言か何かに基づくものであったのかも知れない。<sup>15</sup>

この部分を全部省いてしまったハルトマンの方が、むしろ当時の社会通念からすると、特異な考え方をしていたと言える。『哀れなハインリヒ』でも貴族の騎士と農夫の娘の結婚という、当時の身分制度の下では考えられないような結末で締めくくっていることからしても、ハルトマンは現代の倫理観から見ても妥当し得るような、普遍的な人間愛を持っていたのではないだろうか。いずれにせよ、ハルトマンは罪と贖いというテーマをクレティアンから受け継ぎながら、*mâze* を越えて過度な要求をしたり、不当な振舞いをすれば、社会の平和が乱れ、取り返しのつかない結果を招くということ、力による正義でなく、徳操による正義の大切さを説き、主人公イーヴェインの内面、外面ともの発展、成長の姿を通して、当時の騎士たちにあるべき姿を批判的に訴えたのであろう。なお、この作品でもう一つ見落としてならないのは、ハルトマンのミンネ観であるが、紙幅も尽きたので、機会を改めて論じてみたい。

## テキスト

Hartmann von Aue : *Iwein*. Hrsg. von G. F. Benecke und K. Lachmann. Neu bearbeitet von Ludwig Wolff. 7. Ausgabe. Berlin 1968. (以下、文中で引用の場合は、Iw. 523のように行数を示す)。

Chrestien de Troyes : *Yvain*. Übersetzt und eingeleitet von Ilse Nolting-Hauff (Klassische Texte des Romanischen Mittelalters Bd. 2). München 1962. (以下、文中で引用の場合は、Yv. 23のようにドイツ語訳のページ数を示す)。

## 注

- 1 中島悠爾他訳『ハルトマン作品集』郁文堂 1982 417ページ。
- 2 Vgl. de Boor, Helmut / Newald, Richard: *Geschichte der deutschen Literatur*. 2. Bd. München 1953, S. 80.
- 3 Vgl. Wapnewski, Peter: *Hartmann von Aue*. (Sammlung Metzler M 17) 6. Aufl. Stuttgart 1976, S. 77.
- 4 Vgl. Ruh, Kurt: *Zur Interpretation von Hartmanns »Iwein«*. In: Kuhn, Hugo / Cormeau, Christoph: *Hartmann von Aue*. (WdF. 359) Darmstadt 1973, S. 410 f.
- 5 クレティアン作の原題は『イーヴァーン』(Yvain)であり、勿論、人名の発音もつづりも異なるものがほとんどであるが、同じ人物の場合本稿では便宜上、ハルトマンの『イーヴァイン』の人物名をそのまま使っている。
- 6 Vgl. Brogsitter, Karl Otto : *Artusepik*. (Sammlung Metzler M38) Stuttgart 1965, S. 58.
- 7 ハルトマンではこのあとミネ夫人の働きに触れ、のちのラウディーネの変心にも、男と女の間を調停する強力なミネ夫人を介在させる。また、女性の気の変わりやすさを弁護している。これに対し、クレティアンではこの場面で、イーヴァインは「決して手に入れることができないものを望むとは、私も愚か者だ。私は彼女の夫を殺したのに、彼女に許してもらえるなどと思うのか。まことに私もばかなことを考えるものだ。彼女はちょうど今はどんなものよりも私を憎んでおり、それも当然だ。しかし、『ちょうど今』とはうまいことを言ったものだぞ。なぜなら、女性は気持がころころ変わるものだから。彼女もひょっとしたらそのうちに気持を変えてくれるかも知れない […] (Yv. 83) と考える。クレティアンではまた、ラウディーネが激怒してルーネテを追い払った

場面で、「女性たちは自分の愚かさを認めたがらず、本当は望んでいることでも呪ってみたりする」(Yv. 93) と、女性に対してかなり手厳しい。これに比べると、ハルトマンは女性を擁護し、ラウディーネもルーネテもやさしく描かれている。

- 8 Vgl. Pütz, Horst Peter: *Artus-Kritik in Hartmanns ,Iwein'*. In: *GRM* 53 (NF. 22). 1972, S. 195. Brogsitter: a. a. O., S. 75.
- 9 Vgl. Pütz: a. a. O., S. 194.
- 10 Vgl. Ruh, Kurt: *Höfische Epik des deutschen Mittelalters I.: Von den Anfängen bis zu Hartmann von Aue.* (Grundlagen der Germanistik) 2., verbesserte Auflage. Berlin 1977, S. 148.
- 11 Vgl. Ehrismann, Gustav: *Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters.* Unveränderter Nachdruck der 1927 erschienenen ersten Auflage. München 1938. 2. Teil. 2. Abschnitt. 1. Hälfte. S. 178.
- 12 Zutt, Herta: *König Artus Iwein Der Löwe.* Tübingen 1979, S. 10.
- 13 Vgl. Endres, Rolf: *Der Prolog von Hartmanns ,Iwein'*. In *DVjs.* 40, 1966, S. 529.
- 14 Kuhn, Hugo: *Hartmann von Aue als Dichter.* In: *Der Deutschunterricht.* Jg. 5. 1953, S. 20.
- 15 Vgl. Mertens, Volker: *Laudine. Soziale Problematik im Iwein Hartmanns von Aue.* (Beihefte zur ZfdPh. 3) Berlin 1978, S. 100 ff.

## Hartmanns Kritik am Rittertum — unter besonderer Berücksichtigung von Iweins „schulde“ —

Osamu Takeichi

Hartmann von Aue ist einer der hervorragendsten Dichter im deutschen Mittelalter. Mit zwei ritterlichen Epen stellt er seinen Zeitgenossen das Ideal des Rittertums vor, mit zwei anderen religiösen die richtige geistliche Einstellung. Die ersteren, die sogenannten Artusromane, übersetzt er, vielmehr überarbeitet er Werke von Chrétien de Troyes. Iwein gilt als sein letztes Werk.

H. de Boor sagt: „Am Erech hatte der junge Hartmann eigene Auffassung darstellen wollen und daher an seinem Vorbild so viel gemodelt, daß Zweifel aufkommen konnten, ob wirklich Chrétien seine Quelle, mindestens seine einzige Quelle wäre. Der Iwein ist weit mehr wirkliche Übersetzung. Es ist Hartmanns Zeitvertreib geworden, einem klassischen französischen Werk eine angemessene deutsche Nachformung zu geben.“ Ob die Dichtung für ihn nur Zeitvertreib geworden ist oder ob er in geringen Abweichungen von dem Vorbild seine eigenen Anschauungen sublim beleuchten wollte, das soll hier im Vergleich mit seiner Vorlage untersucht werden.

Nachdem Iwein im Kampf den Quellenritter Ascalon überwunden hat, heiratet er dessen schöne Witwe und wird Herr über das Wunderland. Er ist nun auf dem Höhepunkt seines Glücks. Auf den Rat Gawains nimmt er von seiner geliebten, eben angetrauten Gemahlin Abschied, um sich nicht wie Erech zu verliegen, sondern sich in Turnieren zu üben. Er bricht aber über dem ritterlichen Vergnügen das Versprechen, innerhalb eines Jahres zurückzukehren. Da kommt Lunete als Botin von Laudine und sagt ihm die Freundschaft auf.

Seine Schuld liegt natürlich darin, daß er sein Wort gebrochen und das Vertrauen seiner Frau enttäuscht hat. Aber nach der Rettung Lunetes durch ihn sagt er als Ritter mit dem Löwen, der seinen Namen



verschweigt, vor Laudine:

ichn gewinne gemach nochn wirde vrô  
 niemer mê unz ûf ten tac  
 daz ich wider haben mac  
 mîner vrouwen hulde:  
 der mangel ich ân schulde. (5466–70)

Was bedeutet es, wenn er sagt, er entbehre die Gunst seiner Herrin ohne eigene Schuld? Hier ergibt sich, daß der Held und der Erzähler zu unterschiedlichen Einsichten von seiner „schulde“ kommen. Wenn der Erzähler bei Hartmann seinem Helden vorwirft, daß der den Quellenritter „âne zuht“ gejagt und sich „nâch dem slage“ weit nach vorn geneigt habe, dann wird darauf hingedeutet, daß seine Schuld noch tiefer liegt und seine Ehre als Ritter wesentlich verletzt ist. Das sehen wir schon in Kalogrenants Abenteuer an der Quelle. Ascalon sagt:

riter, ir sît triuwelôs.  
 mirn wart von iu niht widerseit,  
 und habent mir lasterlicheit leit  
 in iuwer hôchvart getân

„hôchvart“ oder „übermuot“, das paßt zu einem guten Ritter nicht. Sie richten viel Unglück an. Befreit von seinem Wahnsinn, ist Iwein nun auch befreit von Übermut und rettet durch eines anderen „übermuot“ bedrängte Leute wie ein von Gott gesandter Ritter. Er vergleicht sich mit König Artus im Prolog. Der König wird im Prolog hochgepriesen. Aber sein im Roman dargestelltes, reales Bild sieht anscheinend ganz anders aus. Kann man hier die Artus-Kritik von Hartmann erkennen? Wir beobachten drei Szenen im Vergleich mit denen bei Chrétien.

Was das Mittagsschläfchen am Festtag betrifft, so beseitigt Hartmann die Vorwürfe von einigen Rittern bei Chrétien. Hier wird „eine

Korrektur im Sinne der Untadeligkeit des Königs“ von Hartmann vorgenommen.

Die Episode von der Entführung der Königin wird bei Hartmann viel ausführlicher berichtet. Hier muß der König als Vertreter der höfischen Norm unter allen Umständen sein Wort halten, und damit zeigt er, daß es Regeln gibt, gegen die man nicht verstoßen darf, um den Frieden der höfischen Gesellschaft aufrecht zu erhalten.

Im Gerichtskampf weicht Hartmann von einer eindeutig günstigen Stellungnahme des Königs der jüngeren Schwester gegenüber ab, und der König erscheint so als gerechter Richter, der sich an das Recht hält. Nachdem das Gottesurteil unmöglich geworden ist, liegt die Entscheidung bei ihm. Er lehrt die ältere Schwester, daß sie „nâch gerihte leben“ soll.

Während Hartmann von der Vorlage das Thema: Schuld und Buße übernimmt, zeigt er, wie sich ein Ritter in der höfischen Gesellschaft verhalten soll, indem er sowohl die innerliche, als auch die äußerliche Entwicklung Iweins darstellt.